

講演会「日本の子どもの文学—昨日・今日・それから」(2011/05/14)

展示会を企画して

宮川健郎

1、展示会の条件

- ・国際子ども図書館が開館して、そろそろ 11 年。はじめて、日本の子どもの文学の通史をあつかう。「企画展」ではなく、「常設展」として。国際子ども図書館の、いわば「棚卸し」。
- ・資料をひたすら刊行年順にならべていく構成。そこから、トピックをパネルとして切り出していく。しかし、子どもの読書には「歴史性」がない。
- ・展示会は成長する。

2、時期区分をめぐる問題点

- ・『赤い鳥』創刊から戦前まで—「童話」の時代

「一方で、既成の作家たちは、戦争協力の態勢を強めていきます。「戦前」と「戦後」のあいだの「戦中」は、子どもを戦争へと追い込む作品が数多く書かれ、子どものためのものであるはずの児童文学が機能しなくなった空白期といえるかもしれません。」(解説パネル 1-3「戦争をはさんで」)

参考 山中恒『戦時児童文学論—小川未明、浜田広介、坪田譲治に沿って—』(大月書店、2010年)

- ・1980年代から1999年まで—児童文学の現在

「その後の児童文学は、理想主義という「決まりきった物語」をのがれて、多様に展開し、2000年代へとつづいていきます。」(解説パネル)

3、日本の子どもの文学の流れをどう見るか

- ・「声」の時代、「声」のわかれ
- ・ほんとうに、「童話」から「児童文学」へ、なのか。

「小川未明」という伏流

「アクティヴな方向」をめざしたけれども、やがて「ネガティヴなもの」をかかえこむことになる現代児童文学(那須正幹『ぼくらは海へ』1980年、森忠明『少年時代の画集』1985年など)

1990年代以降の児童文学／文学のボーダレスと「未分化の児童文学」ということ(江國香織『つめたいよるに』1989年など)